

~~~~~  
書評・紹介  
~~~~~

李鍾徹

『世親思想の研究——『釈軌論』を中心として——』

箕 浦 暁 雄

一

経量部の名称の下で纏められる仏教教義学とは何であろうか。アビダルマ研究の分野では経量部という名称が具体的に何を指すものであるかについて今日まで多くの研究者によって議論されてきた。近年、経量部に関するますます興味深い研究が提示され多くの関心を集めている。ここに紹介する『世親思想の研究』は直接経量部研究という論題設定をしていないまでも、今日の研究状況に照らして重要な意味を持つであろう。

著者李鍾徹 (Lee, Jong Cheol) 博士は、本書はしがきによれば、韓国ソウル大学哲学科 故沈在竜教授の下で仏教研究をスタートされ、一九八六年から一九九二年まで東京大学大学院の故江島恵教博士の下で主としてアビダルマ研究に従事してこられた。長く日本で研究活動されたことから、とくに日本におけるアビダルマ研究の分野ではよく知られた研究者の一人である。これまで、仏典の電子化に多く寄与されてきたこともご承知のことであろう。現在は、韓国精神文化研究院 韓国学大学

院 (Graduate School of Korean Studies, The Academy of Korean Studies) の副教授に着任され、韓国仏教に関する研究も含め多数の研究論文を公表しておられる。

本書は一九九四年に東京大学に提出された学位請求論文に修正を加えて出版されたものである。第一巻は『釈軌論』を主とする世親の教義学研究の成果であり、第二巻は、チベット語訳『釈軌論』の校訂テキストである(出版に際しては、校訂テキストが先に *Bibliotheca Indologica et Buddhologica* 8 として刊行され、研究編である『世親思想の研究』は *Bibliotheca Indologica et Buddhologica* 9 として刊行された)。タイトルの通り、本書の関心は『釈軌論』を中心として『俱舍論』から『釈軌論』へと展開した世親の教義学説を明らかにすることにある。

『釈軌論』研究は、山口益博士によって最初に取り上げられたが、それ以後若干の研究があるのみで、著者が指摘する通り世親研究のなかでもいまだ未開拓の領域である。山口博士は『釈軌論』全体的内容を概説し、とくに第四章で世親が展開する大乘非仏説論批判を紹介した(『世親の釈軌論について』一かりそめな解題というほどのもの)、『日本仏教学会年報』二五、一九五九年(『山口益仏教学文集』下、春秋社、一九七三年に再録)、『大乘非仏説論に対する世親の論破』『東方学論集』一九六二年(『山口益仏教学文集』下、春秋社、一九七三年に再録)。その後は本庄良文教授・松田和信教授・宮下晴輝教授等によって取り上げられてきた。本庄教授はこれまで第四章の翻

訳を提示した（『釈軌論』第四章―世親の大乗仏説論（上）―）『神戸女子大学紀要』文学部篇二三卷一号、一九九〇年。「同論」下「同誌」二五卷一号、一九九二年。また、本書と時を同じくして第一章の部分訳を公表されている（『釈軌論』第一章（上）―世親の經典解釈法―）『香川孝雄博士古稀記念論集 仏教学浄土学研究』永田文昌堂、二〇〇一年。

このなかで注意すべきは『順正理論』の阿毘達磨仏説論と『釈軌論』の大乗仏説論とが酷似しており、阿毘達磨仏説論が大乗仏説論を用意したのではないかと指摘である。本庄教授は、パーリ『大般涅槃經』の「經に入り、律に示すことができるなら仏説であり、そうでなければ仏説ではない」という一節が、説一切有部では「經に入り、律に示すことができ、法性に背反せぬなら仏説であり」となっていることを確認する。本庄教授は、經量部とは世親以前から存在した勢力グループであって、説一切有部内で阿毘達磨が仏説であることを否定する勢力として現れてきたとみなす。よって、經量部の実態説明は、その意味で聖典論から出発しなければならないと主張する点には十分注意しておきたい。いっぽう、松田教授は『釈軌論』で言及される二諦説を検討された。『俱舍論』は *purvācārya* と言及される無著説は『釈軌論』では世親自身の二諦説として提示され、『成業論』を経て『緣起經釈』では *purvācārya* ではなく単に *ācārya* と呼ばれることを報告する（『Vyākhyāyukti』の二諦説―*Vasubandhu* 研究ノート（2）―）『印度学仏教学研究』第三三卷第二号、一九八五年）。さらに松田教授は、世親の著

述順序を確認しながら、『釈軌論』で大乗仏説論を擁護した世親は、三性説を確保しながらもアラーヤ識説を中心とする心識論については經量部説に留まることに注目する。このことを考慮し心識論のみによって世親の思想的変遷を判定することが本当に妥当なのかどうかあらためて問題提起した（『教説と意味―釈軌論・第四章より―』『大谷学報』第六三卷第二号、一九八三年）。また、宮下教授は『俱舍論』と『釈軌論』で扱われる有貪心・離貪心を取り上げている。有部によれば、有貪とは貪による結合（*samyogāḥ saṃyuktā*）を意味する。『俱舍論』のなかで世親は三つの点から有部説を批判する。それは、結合が貪の得の連続を意味する点。結合が貪の随増であり、随増する貪の把握対象となるという点。そして結合を得の連続と見なした場合には他心智の対象とならないと批判する。これらの批判は世親が教義学内の整合性を争い結合なる概念を容認しないことを示している。にもかかわらず、『釈軌論』では三つの經典が引かれ、結合や連合（*saṃyoga*）による解釈も含め解釈例が並記されている。これを宮下教授は、經典の意図や解釈が教義学内の諸問題に先行するからこそ『釈軌論』では三つの解釈例が並記されていると読み解く。つまり、教義学のなかに經典解釈が閉じこめられるのではなく教義学に先立つ經典解釈の可能性を『釈軌論』により打ち立てようとしたのではないかと指摘した（『アビダルマ教義学の一局面―『俱舍論』から『釈軌論』への展開例―』『大谷学報』第六三卷第一号、一九八三年）。

今日までの主たる『釈軌論』研究はおおよそ以上のように把握しておいてよいであろうが、『釈軌論』というテキストの性格を分析し、教義学史の上に位置付けようとする本格的な研究は大きな課題であったし、今日もなおその点では変わりがない。本書は、『釈軌論』の全体像に、また世親という一人の思想家に接近したいと取り組んできた研究者に少なからず刺激を与えてくれるはずである。

なお、本書『世親思想の研究』刊行以降には、スキリング博士によつて『釈軌論』研究 (Vasubandhu and the Vyākhyāyukti Literature, *JIAS* 23.2, 2002) が公表されている。ここでは言及しないが『釈軌論』に関する最も新しい研究成果として知っておいてよい。

二

本書は三章からなる。まず第一章 世親研究のための予備的考察では、世親の思想的展開を見定めるための指針が示される。よって予備的考察とはいえ本研究のなかでも重要な位置を占め、三章のうち最も多くの紙数が割かれている。

著者は世親の思想的立場を論ずるにあたって、フラウワルナー博士が唱えた「世親二人説」より中国・チベットの伝承に従い『俱舍論』の作者世親が如何に大乘唯識思想家に転じるかという世親の思想的変貌過程を検討すべきと主張する。その際、世親の年代は宇井博士の説に従って三二〇—四〇〇年を無難な説として採用する。ただ、著者が宇井説を採用する根拠はあま

り明白ではない。今日までの研究を加味した総合的な判断ということがあるが、宇井説の採用は、本書で解明しようとする問題の解決に何ら新たな視点を与えているわけではない。その点再検証が必要かもしれない。

そして、フラウワルナー博士の説に対して、世親が一人か二人かという問題に深く入るよりは：中略：世親の諸著作の内的連関関係や思想的な一貫性の究明に取り組むことから出発しようという態度をとる。著者の結論を先に紹介するならば、世親は『俱舍論』著述時には経量部的な考えを強くもつていて、次に著した『釈軌論』の段階から本格的な唯識思想家（大乘の思想家）として台頭する。よって、『成業論』の立場を経量部としたラモット博士の説は認められないと主張する。

このことを検証すべく、まず分析の出発点は『俱舍論』本頌の著者世親であり、世親の名で伝えられている諸著作のうち、文献的な証拠をもって彼の著作として認めてもよい著作群を確定するという方針を立てる。世親の著作と考えられる諸文献の記述からみて、『俱舍論』→『釈軌論』→『成業論』→『縁起經釈』の順に著されたと確定する。さらに安慧『五蘊論釈』と称友『俱舍論明瞭義』と衆賢『順正理論』の記述から、『五蘊論』・『中辺分別論釈』・『唯識二十論』・『唯識三十頌』を世親の著作と判断し、『大乘莊嚴經論釈』には『中辺分別論釈』に議論の説明を譲る箇所があることから『大乘莊嚴經論釈』を世親の著作と確定する。結果、プトウンの伝承通り、八部の小論 (prakaraṇa) を世親の著作と考えておいてよいと確認する。

を指摘できたことである。

このことを前提として、世親の諸著作のなかで共通して取り上げられる問題を検討することによって、世親個人に見られる教義学上の立場の変遷を読みとろうとする。また同時にそれら諸著作における変遷が、確実に一人の学匠における思考の連続性であると判断することができるなら、先に予備的考察で示した諸著作が世親一人の手によるものであることの証左にもなる、と著者は考えるからである。具体的には「世親の諸著作の内在的連関関係」と称して世親の思考の連続・連関を、「心(citta)の語義解釈」、「仏説(buddhavacana)・非仏説論」という二つの主題のうちに読みとろうとする。「心の語義解釈」は著者も注記する通り、かつて兵藤一夫教授(「心」の語義解釈―特にヴァスバンドゥの立場を中心として―「仏教学セミナー」三六、一九八二年)が論じた問題である。基本的にはその域を出るものではないが、世親の諸著作のうちに見られる連続性をそこに再確認している。そして、「仏説・非仏説論」の問題については、一・二 世親の“buddhavacana”(仏説論、

一・三 世親の解釈学的地平―密意(abhiprāya)―と新たなセクションを設けて、『釈軌論』に基づいて整理している。

この予備的考察で得た結論は大きく二つに纏められることになる。まず第一は、先に紹介した通り『俱舍論』↓『釈軌論』↓『成業論』↓『縁起経釈』という成立順序を確定し得ることさらに『五蘊論』・『中辺分別論釈』・『唯識二十論』・『唯識三十頌』を世親の著作と断定してよいことである。第二は、大乘仏説・非仏説論の議論から世親に固有の解釈学の手法があること

以上の予備的考察の結論を仮定的前提として『俱舍論』と『釈軌論』のなかで共に扱われる論題を検討することで、著者は『俱舍論』から『釈軌論』への教義学の展開を把握しようとする。著者が扱う主題を評者が再整理するなら、「一」縁起の意味規定―縁起の語義解釈(語の意味 padartha)と定型句解釈(文の意味 vākyārtha)、「二」識の解釈(認識の主体の問題)、「三」三世実有説、「四」色の解釈、「五」十二処の解釈、「六」十八界の構造となる。これらのうち、「一」縁起の意味規定は、第二章 縁起(pratīyasamutpāda)で扱われ、なかでも、縁起の語義解釈は詳細に分析されている。いっぽう「二」から「六」で扱われる主題はすべて、第三章 縁起と識(vijñāna)の生起のなかで扱われることになる。

以上、予備的考察を概観したが、中国とチベットの伝承通りの世親の思想的展開を諸文献の上に跡付けていくという方法については、第二章を概観した後にあたためて言及したい。ここでひとつ指摘するならば、中国やチベットの伝承も自明の歴史事実として受け取っておいてよいかどうかは不明である。例えば、プトゥンによる世親の八部の論書に関する伝承についてであるが、すでに袴谷憲昭博士(「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」「チベットの仏教と社会」春秋社、一九八六年)が指摘している通りスタインやペリオ将来の敦煌文献(S.13, P.70)に現れる仏典名はプトゥンのそれと必ずしも一致しない。誤記なのか吐蕃期の敦煌における一つの伝承であ

るのか評者は袴谷博士以上の判断材料を持ちあわせていないが、注意しておく必要がある。もちろん著者も検証の必要なしと考えているわけではないであろう。我々は、伝承や歴史叙述をその通りに受けとめながら、いっぽうでそれらは時代の変革に従って描き直されていくものであるという点にも留意しておかなければならない。

第二章 縁起 (pratyasaṃutpāda) と pratyā-

samutpāda の語をめぐる文法上の議論 (語の意味) が詳細に紹介される。ここでは『俱舍論』における世親、シュリーラータ (『俱舍論』では他者 (apare) とあるのを、著者は一応ヤシヨミトラを信じてシュリーラータと見なすと述べ他の注釈に言及しないが、評者が確認したところ安慧も満増も同じくシュリーラータと注釈するので、ひとまずそのように確定しておいてよいであろう)、そして『順正理論』における衆賢の解釈が比較検討される。これら三者の相違点は pratyā の解釈にある。まず『俱舍論』で世親は「縁に達して、出現すること (pratyayaṃ pratyā samudbhavaḥ)」と解釈する。ところが、文法学派側からすれば、もしそのように解釈するならこの二つの作用に時間の前後を認めなければならない。しかも、前の「縁に達した」段階では、後に出現する作者は存在しない。逆に存在していない作者は「縁に達する」という作用をなし得ない。そこで最終的に世親は、作用が設定される限りは作者をも設定しなければならず、両者を分離して考えることはできないという点から、その批判に対抗する。著者はこの作用と作者の

問題に踏み込むべく『釈軌論』を検討する。著者によれば世親が引く文法学派側からの批判の論点はほぼ『俱舍論』と同じで、世親による返答にいつその詳細さが認められると言う。『釈軌論』や『縁起経釈』で pratyā の *lyap-pratyaya* が原因を表すことを確認した後、『俱舍論』「破我品」で pratyā の意味をさらに検討する。そこでは世親による犢子部批判の論点が整理される。その批判の論点は、先に語義解釈の議論を通して纏め得た時間的に先行する生起の本質的原因 (A) を獲得し、それと同時に生起に向かいつつある未来の非存在 (B) が出現することという規定に基づくものである。そしてこれこそが世親の縁起の語義解釈によって導き出された結論なのである。

縁起の語義解釈に続いて、次に『俱舍論』と『縁起経釈』に基づいて「これ有るときあれ有る。これ生起するが故にあれ生起する。 *asmin satīdānī bhavati. asyotpādād idam utpadyate*」という縁起の定型句をめぐる議論 (文の意味) が検討される。ここでは両論書当該箇所翻訳が提示され、最後に論評が加えられている。『俱舍論』ではまず四つの定型句解釈が示され、続いて他者の説 (A)、先代軌範師の説、他者の説 (B) が提示されている。ヤシヨミトラによれば、四つの解釈は軌範師 (世親) の説であり、他者の説 A、B は順にヴァスヴァルマン、シュリーラータの説である。ただし『縁起経釈』で最初の四つの解釈のうち第二説から第四説までが批判されることから、世親の定型句解釈の結論は、第一説「縁を限定するために〔二句を説いたのである〕」ということになると著者は

確認する。『俱舍論』と『順正理論』における定型句解釈については評者も検討しているので、別稿(『順正理論』における心心所法の共存論証)『仏教学セミナー』七七、二〇〇三年)を御参照頂きたい。

縁起の語義解釈と定型句解釈を分析した結果、縁起は世親に言わせると、いわゆる縁起の十二支にのみ適応できる概念ではなく、一切の縁生法に適用すべき生起の法則を意味しなければならぬ、と著者は論評する。このこと自体至極当然の結論として確認しておかなければならないが、これは決して世親が独自に提唱したものではない。縁起解釈の転換点は『婆沙論』のなかで縁起の意味が有情数縁起、有情数非有情数縁起とに明確に分節されたことにある。それを契機として、苦の生起という事態を諸法の生起と消滅の原理として展開することが可能になったと捉えておくべきであろう。よって、それを世親のもつ思想的な意義として言及するのは正確ではない。

著者はこれまで一貫して『俱舍論』著述時の世親を経量部の傾向を強くもつあるいは経量部的立場にあると言及してきた。いっぽう第二章の結論に至って、縁起の語義解釈や定型句解釈個所では経量部師シュリーラータを批判するし、他の個所でも世親が多くシュリーラータを批判することを根拠に、世親の立場をそのように表現するのは再考すべきではないかと言及する。また、先の予備的考察で確認した通り、著者は、中国とチベットの伝承に基づき、世親には著述順序に従って教義学上の立場の変遷があるということを前提として、世親という思想家を捉

えようとしている。ということは、この前提の下で経量部という名称をどのように理解することになるのであろうか。そもそも『俱舍論』という書物は、その伝播の過程で説一切有部の教義学の勝れた綱要書として重要視されてきた。また『俱舍論』著述時にはすでに『瑜伽論』をはじめとする瑜伽行派の論書が確固たるものとして存在していたのである。にもかかわらず『俱舍論』を著した世親の意図は何であったのか、あらためて問い直さなければならぬ。さらに『成業論』の記述をどのように位置付けるか、問題は山積している。ともかく、世親の思想的立場を検証するという本書の主題はさまざま経量部問題に直結する。よって、『経量部』という言葉を用いる際にはそもそも最初から相当注意が必要である。

第三章 縁起と識 (vijñāna) の生起では、著者の言葉を用いるなら存在の生起に対して認識の生起についての世親の見解が検討される。シュリーラータは *prāṭhyasamutpāda* の *prati-*を *vipśa* を表す *nipāta* と理解した。 *vipśa* は「種々の何々」を表すことから、不特定多数の縁によって法が生起することを意味するものと解さなければならぬ。存在の生起(とくに十二支の各支分の生起を意味する場合)については妥当であるが、識は必ず特定の感覺機能と把握対象によって生起するから、先に検討したシュリーラータの縁起解釈は認識の生起という点からは容認し得ないものとして世親は批判すると言う。このことから本章では『釈軌論』における識の解釈、『俱舍論』における三世実有説、『俱舍論』と『釈軌論』における色の解釈、『釈軌

論』における十二処、さらに『俱舍論』における十八界が検討される。著者は、これらの議論を手掛かりに、世親が認識をめぐって何を議論しているか検討しようとする。

扱われる論題は多岐に渡りすべてを漏れなく紹介することは評者の域を超えている。ひとつ興味深い点に言及するなら、『釈軌論』における認識主体の議論である。それは「識るが故に識と言われる」という一節をめぐり世親と、徳慧の『釈軌論注』によって文法学派と措定される対論者との間に展開する議論である。世親は *bhāvanā* にすぎないものについて作者として説くことは正しくない、と主張する。無作用説の議論が『釈軌論』にも登場するこの個所は注意しておかなければならない。

さて、この第三章では他にも様々な論題が提示され、著者が長年研究を進めてこられたその経過を窺い知ることができ。ただ強いて言うならば縁起と識の生起という章題のもとでこれらの論題を一纏めにしたことは、若干散漫な印象を与える結果になったかもしれない。第三章で触れられる問題はどれも『俱舍論』から『釈軌論』への展開例を例証するものであるにもかかわらずである。むしろ、第一章の予備的考察を出発点として、例えば縁起論のみに絞って論じることができればよいのかもしれない。周知の通り『俱舍論』の縁起論だけとってみても他にもまだ検討すべき多くの議論がある。

著者は文法学に精通していることから、多く文法學上の議論が行われる個所を検討の対象としている。本章でも随所にパー

二を引用し *viññāna, asat, rūpa* の語義解釈を中心として文献の主題を読み解いている。そうであるなら、むしろ一貫して諸論書の文法學上の議論を第一に読み解くという方針を宣言した上で、その分析結果をよりひろい教義學のコンテキストのなかで再検証するという態度をとられてもよかつたのではないかとさえ感ずる程である。いずれにしても文法學上の議論を多く扱われた点はこれまでの研究にない特徴と言える。

三

以上、極めて大雑把に著者の記述を辿ってきた。紹介し得ていない点も多々あり、本書の内容を十分に伝えることができていない。また、著者の論述の意図を十分に汲み取ることができていないところがあるかもしれない。それによって本書に対する魅力が半減してしまつてはいないかと恐れている。世親思想の解明という大胆なテーマを設定しつつ細心の注意を払いながら進められた著者の堅実な研究はまずもって評価されなければならないであろう。ただ評者は、著者とは若干異なつたところに世親の思想解明の出発点を設定したいと考えている。恐らく、思索の発展段階を前提として思想解明が可能となるという態度と、あくまで教義學の意図を探るという態度との相違ということになる。

とはいえ、本書の研究は有益な情報を我々に提供してくれている。評者自身、今後しばしば本書を紐解きながらテキストを読み進めることになるであろう。本書が扱う論題のなかで、テ

『印度哲学仏教学』第一七号、二〇〇二年）がある。文法學上の議論について専門の立場から若干の指摘がなされているので、御参照頂きたい。

クストが詳細に検討されるのは主として文法學上の議論であることはすでに御紹介した通りである。アビダルマ研究者による本格的な言語の構造分析に関する研究はそれ程多くはない。その点で本書は有益な研究資料であると言ってよい。読者諸氏はぜひ本書をじかに紐解いて頂きたい。本書を手掛かりに我々はいくらか『釈軌論』の詳細に分け入ることができる。ただしなお残存する問題が多く『釈軌論』という論書の全体像はいまだ明らかでない。『釈軌論』というテクストはそのタイトルが示す通り經典解釈の軌範について説くために著されたものである。世親が各著作を準備したときの教義學上の立場をどのように捉えておいたらよいのか。一連の著作のなかでこの『釈軌論』はどのような位置を占めるのか。思想史上どのような意味を持つと捉えておくべきかについては現時点で簡単には言及し難いように思われる。それには何よりも『釈軌論』全体の翻訳研究が待ち望まれる。本稿では研究編にあたる『世親思想の研究』のみに言及し、先に刊行されたチベット語訳『釈軌論』の校訂テクスト *The Tibetan Text of the Vyākhyāṇī of Vasubandhu* の詳細には触れることができなかった。本校訂テクストは、北京版を底本にチヨネ、デルゲ、ナルタン版によって訂正が施されその異同が注記されている。あわせて御参照頂きたい。続いて

本著者李博士によって『釈軌論』の翻訳が刊行されることを期待しながら、『釈軌論』研究は私を含めアビダルマ研究に携わる研究者共通の課題であるとの思いを新たにしたい。

付記 本書についてはすでに岩崎良行氏による書評紹介

The Tibetan Text of the Vyākhyāṇī of Vasubandhu : critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking Editions, Bibliotheca Indologica et Buddhologica 8; ii + 313 pages.

Tokyo : The Sankibo Press, August 2001.

ISBN 4-7963-1008-8

A Study of Vasubandhu—With special reference to the Vyākhyāṇī—, Bibliotheca Indologica Buddhologica 9; xiv + 252 pages.

Tokyo : The Sankibo Press, November 2001.

ISBN 4-7963-1009-6